



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世ドイツのいくさ物語（2）
Author(s)	寺田，龍男
Relation	北海道大学平成遠友夜学校．2015年2月17日．北海道大学遠友学舎．
Issue Date	2015-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57978
Type	lecture
File Information	20150217terada.pdf



中世ドイツのいくさ物語（2）

2015 年 2 月 17 日 於・平成遠友夜学校

寺田龍男（北海道大学）

tterada@imc.hokudai.ac.jp

1 「いくさ物語」を東西で比較する — 『ニーベルンゲンの歌』と『平家物語』

両作品の冒頭

『ニーベルンゲンの歌』の冒頭には以下の詩節がある：

私たちには古い物語で不思議なことが数多く伝えられています
— 誉れある勇士たちについて、大いなる戦いの苦難について、
喜ばしいことや宴の数々について、涙が流れたことや嘆き悲しんだことについて、
猛き勇士たちの戦いについて — これからみなさまに不思議な話をお聞かせしましょう
(『ニーベルンゲンの歌』第1詩節 <私訳>)

この詩節はインパクトが大きかったらしく、後代のいくつもの作品に影響が見られる。
同様に全体を俯瞰する導入部が『平家物語』にも。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらわす。
奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の
塵に同じ。(…) まじかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝う
け給るこそ、心も詞も及ばれね。
(『平家物語』祇園精舎)

どちらも作品の構想を提示する点で共通している。

(相違する可能性)

『ニーベルンゲンの歌』の導入詩節は、作品（原本）成立時（1200 年頃）にはなかった可能性が高い。少なくとも、古態を残すとされる写本 B（1230–60 年頃）にはない。中世ドイツの物語文芸では「昔あるところに…がいた」のような出だしで始まるものが非常に多く、写本 B の最初の文「ブルグントの国に高貴な王女がいた」もこのパターンとみなしうる。

これに対して、1230 年頃の成立と推定される『平家物語』の写本は、もっとも古態を残すとされる応永書写延慶本でも 1420 年（応永 27 年）頃の成立。この本には冒頭のくだりがあるが、「権威」ある覚一本（1370 年頃成立、おそらく「祇園精舎」あり）の後に書かれている。

→ 「オリジナル」の成立から 200 年近くが経過している。現存の応永書写本も、100 年前の延慶本（1309,10 年）の本文を忠実に書写したかどうかは不明。さまざまな本文が生まれては消え、消えては生まれたのではないか？ ならば「祇園精舎…」も当初からあったかは疑問。

2 「いくさ物語」とは何か？

① 「いくさ物語」は本来日本文学で用いられる用語

全体の中で戦争や戦闘が大きな意味を持つ物語。日本では『古事記』・『日本書紀』から軍記物語（『将門記』・『陸奥話記』・『保元物語』・『平治物語』・『平家物語』・『承久記』・『太平記』など）、その後のさまざまな芸能まで包括する広い概念

英語では **Heroic Poetry** と表現され、一般には英雄叙事詩と訳される。ホメーロスの『イーリアス』・『オデッセイア』以来の伝統がある。イギリスのセシル・モリス・パウラによれば、英雄とは、「名誉や名声を得られる行為に命を賭ける人間」である。英雄はつねに衆に抜きんで、通常のはるかにこえた人間であり、腕力に限らない特別な能力をもつとされる。そしてこの人並みはずれた力によって英雄は常識では考えられない偉業を成し遂げ、並みの人間にはけっしてもちこたえられない状況を生き抜くのである。

英雄の物語はこのような人間の活躍と運命を描くことで彼らをいわば讃えるのである。しかし戦いが日常だった時代にあつては、英雄の偉業も第一に武力によって達成されることとなる。英雄が英雄であることを証明するためには、勇気や不屈の精神、積極的に困難に立ち向かう気がまえだけではすまないことになる。すなわち彼自身の生命をも賭する心意気が必要となる。

「英雄についての語り」は、大きな戦いがあるたびに生まれていたにちがいない。「合戦は、それが武力衝突にいたるまでの原因と経過があり、劇的な合戦と戦いが終わったのちに、勝者と敗者のたどる運命（は）、広く人々の関心をひく」（大隅 10 頁）

（参考）

日本では軍記物語諸作品が史実をもとに書かれている（ただし虚構の要素多数）。登場人物の多くは実在し、作品内に具体的な地名や年月日まで記載されている。そのため（留保つきながら）しばしば歴史学者からも引用される。しかしドイツのいくさ物語は、歴史学の実証的研究で引用されることはまずない。（ただし、歴史資料が証明する「点」と「点」をつなぐ材料（線）として、近年文芸作品への関心は高まっている。）日本の軍記物語は、ヨーロッパの研究者には「年代記」ととらえられることがある。

② 『ニーベルンゲンの歌』は 13 世紀初頭の詩人による創作。つまり

口頭伝承をもとにしてはいても作者の独創性が高い作品。（例：女性主人公の紹介で始まる一ふつうは男！）

→ 「独創性」が高いということは、口頭伝承にそのまま依拠したのではない、ということ。

→ 日本の軍記物語と西洋の英雄叙事詩は同列か？

戦う男たちの「武勇と不屈の魂を称揚する」点では共通。しかし西洋の研究者はまったく別ものと見る：日本の物語は具体的な史実にもとづき、年代・場所・人名がかなりリアル

↔ ヨーロッパの叙事詩では、多くの場合年代は不詳で人物も存在が証明できない

↔ 寺田はそれでも、両者を包括する概念を模索中…ヨーロッパでは、**Heroic Poetry**,

Heldendichtung（『ニーベルンゲンの歌』・『ベーオウルフ』・『ローランの歌』など）が通

常「英雄叙事詩」「英雄詩」と訳されるが「英雄文芸」を提案したい。

明治維新後、欧米の進んだ文物や学術が導入された際、文学研究でも「叙事詩」論がさかんになった。そして実は日本にもこういうもの（叙事詩）があるのだ、という見方が尊ばれた。これがのちに、文明の遅れたアジアでひとり日本だけが近代化に成功した、という考え方に通じる。（→ 他のアジア諸国では受け入れられていない。）

3 「中世ドイツのいくさ物語」の特徴

① 「力の強いものは他人のものをも略奪する権利があるという武力賛美」（相良訳・後編 350 頁）

「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（『マタイによる福音書』26,52）ことは当時の人々の共通認識だった。そして「英雄」とは殺しまくったものの自分は殺されずにすんだ者でもあった。（そして最後は自分も倒れる）

→ 主人公ジーフリトは、力づくで美女クリエムヒルトをわがものにしようとウォルムスに乗り込む。長期間待たされるが、結局相思相愛となった二人は目めでたく結ばれる。

→ しかし夫を兄王の家臣ハゲネに殺されたにもかかわらず、クリエムヒルトは兄王のもとに残り、わが子が待つクサンテン（ジーフリトの居城）には戻らない。「部族社会」の思考パターン。現実社会では政略結婚がほとんどで、「結婚式の当日初めて相手の顔を見る」式の（すなわち恋愛抜き）婚姻が主流だったにもかかわらず、文芸の世界では「恋愛の成就」が流行した。

② 「たとえ死ぬ運命とわかっていても名誉を守るためには戦いぬく」という悲劇的運命観

→ 「死ぬかもしれない」というリスクが逆に勇猛心を駆り立てる

（『ニーベルンゲンの歌』のハゲネ、『古アトリ之歌』（900 年頃成立か）のグンナル）（註1）
こうした筋立てはそれなりに人を感動させる。しかし…

→ 「ニーベルンゲン的忠誠心」は第二次世界大戦当時さかんに宣伝され、『ニーベルンゲンの歌』は当時国民の必読書された。またヒトラーらを作品の登場人物になぞらえるプロパガンダも行われた。

③ 腕力と武勇が強調される一方で、男たちは大声を上げて泣く

→ 声をあげて泣くことで悲しみを昇華させるという現象は、古代には多くの文化圏でみられる。しかしこの点で中世ドイツのいくさ物語は同時代の他の文芸ジャンルと大きく異なる。社会ではすでに、男が泣くことを恥じる気風が広まっていたか（？）。

逆に日本では、あらゆる文芸で男も女も「袖をしばって」泣く。しかも『平家物語』は泣きすぎである。」（上横手 147 頁）

④ 勇士どうしの一騎打ちもあるが、軍団同士の合戦と大量殺戮の場面が典型的

→ 東西に共通の現象。「剣は兜だけでなく頭蓋骨まで打ち砕いた」という表現は、剣や刀が主要な武器だった時代を象徴する。

(註1)

- 『ニーベルンゲンの歌』ではブルグント一族がフン族の国に向かう途中、ハゲネが水の精と出会う。彼女は「ドナウの河を渡った者の内、生きて戻るのは王の司祭ひとりだけでしょ」と告げる。やがてハゲネはひとりの僧侶を河に突き落とす。すると泳げないはずの僧侶が泳いで無事に岸にたどりつく。これを見たハゲネは自分たちの運命を悟る。そして全員が河を渡り終えると、渡し舟を剣で叩き壊してしまう。自ら退路を断ち、運命と戦うためだった。悲劇的運命観「運命と知りつつも、名誉を守るためにはこれと戦い、死ぬことも辞さない。」(裏切り者を出さないためでもあったか?)
- ここにいう「名誉を守る」とは、衆に抜きんでて勇敢な戦士として認められることと同義だった。逆に臆病者の烙印を押され、後代まで軽蔑の対象となることを彼らは極端に恐れていた。(同種の記述は、「いくさ物語」に限らず世界中の文芸作品でよく見られる)
- 『古アトリの歌』でグンナル王は、妹を嫁がせたアトリ王から宴への招待を受ける。来れば宝物も贈ると伝えられる。財宝はもう十分あるとして、グンナルはこの招きを断わろうとする。ところが狼の毛を巻きつけた指輪が添えられているのを発見する。これは来れば殺されるという、妹グーズルーンの警告だと悟ったとたん、グンナルの考えは一変する。死の危険が逆に彼の好戦心をかき立てるのだ。(なお『古アトリの歌』ではグーズルーンが夫アトリとの婚姻縁よりも兄グンナルとの血縁を優先しているが、『ニーベルンゲンの歌』では物語の最後までクリームヒルトが亡父ジーフリトとの婚姻縁に最大の価値・意義を見出している点で、素材は同じながら筋立てに大きな違いがある。)
- (参考)『ギルガメシュ叙事詩』では主人公ギルガメシュがたえず(より高い)「名声」を獲得しようとし、かつまた後世にその名を残そうとする意識をむきだしにしている。ギルガメシュは「人の命には限りがある」ことを(半神半人とはいえ)ふまえ、たとえ敗れて死ぬリスクがあっても、名声を残すためには敢えて戦いに臨む姿勢を見せる。ただ、神託で凶兆が出たときは涙にくれている。ここに古代的特徴を見て取れる。
- 「名声のためには死を恐れないで戦う」「涙を流すことを恥じない」
- 逆に逃げると卑怯者・弱虫・「男らしくない」等のレッテルを貼られる。
- 『源平盛衰記』第九卷「我戦場に向ひなば、生きて帰らん事ありがたし。(…)進まんとすれば生死遁れがたし、退かんとすれば不覚の名憚りあり。敵に向ひなば、命を生きて帰るべからず。これ弓矢の家を思ふ故、子孫の末を存ずる故なり。」
- 戦士として生きる男たちには東西を問わず共通の運命観・倫理観・死生観といえる。
- 『ラヴェンナの戦い』「生き残った者たちは逃げた。男らしい振る舞いをする者は一人としていなかった。」
- このような表現により、英雄の英雄らしさがいっそう強調される。

(参考文献)

- 『平家物語』(上) 梶原正昭・山下宏明(校注) 岩波書店 1991年(新日本古典文学大系)
- 『ジークフリート伝説集』 石川栄作(編訳) 同学社 2014年
- 上横手雅敬『源平争乱と平家物語』 角川書店 2001年(角川選書)
- 大隅和雄『中世 歴史と文学のあいだ』 吉川弘文館 2011年

- 寺田龍男『『ケルン教会家人法』と『アルプハルトの死』に見る主従関係の回復と仲介者の役割』『独語
独文学研究年報』（北海道大学）28号 2001年 1-14 頁
- 『ディートリヒの歴史叙事詩』における>Beasts of Battle<のモチーフについて』『大学院国際広
報メディア研究科・言語文化部紀要』（北海道大学）46号 2004年 137-155 頁
- 「軍記物語と英雄叙事詩—成立・書承期の社会背景—」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化
部紀要』（北海道大学）48号 2005年 133-154 頁
- 「軍記物語と英雄叙事詩（2）—J. Bumke による『不確定テキスト』（'Der unfeste Text'）の概念
を中心に—」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』（北海道大学）49号 2005年 89-107
頁
- 「軍記物語と英雄叙事詩（3）—ヨーロッパ中世における二重の主従関係—」『大学院国際広報メデ
ィア研究科・言語文化部紀要』（北海道大学）50号 2006年 1-16 頁
- 「軍記物語と英雄叙事詩（4）—享受史の一側面—」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部
紀要』（北海道大学）54号 2008年 1-17 頁
- 「軍記物語と英雄叙事詩（5）—概念規定に関する諸問題—」『メディア・コミュニケーション研究』
（北海道大学）57号 2009年 35-54 頁
- 「中世ドイツ文学の発信型研究の試み」『メディア・コミュニケーション研究』（北海道大学）61号
2011年 169-184 頁
- 『リーンハルト・ショイベルの英雄本』に関する諸問題』『北海道大学大学院教育学研究院紀要』
118号 2013年 179-193 頁
- 「中世ドイツ文学の研究と教育—『ニーベルンゲンの歌』をめぐる近年の学術出版状況から—」『北
海道大学大学院教育学研究院紀要』121号 2014年 1-15 頁
- （ここにあげた拙論はすべてオンラインで公開しています。北海道大学図書館の HUSCAP をご覧いただ
ければ幸いです。）



（付記）この発表は、JSPS 科研費 23520358 による研究成果の一部を、市民のみなさまに公開すること
を目的としたものです。その機会を与えていただいた平成遠友夜学校では、2014年11月25日の第1回
につづき、多くの方々が熱心にお聞きくださいました。今回も藤田正一先生と江川美奈子さんをはじめ、
すべての方々にお礼を申し上げます。なお HUSCAP 掲載にあたり最小限の補正を施しました。